兵庫県教育委員会丹波教育事務所　学校問題サポートチーム

TNBだより



令和6年8月号

教育相談の進め方　～まず受け止めることから～

夏休みを終え、学校生活のリズムが戻るまで子どもたちも教職員の皆様も大変かと思います。不登校や自死が増える時期の９月に向けて、今回は、教育相談について考えてみます。

１　子どもたちが相談できることが一番大事

孤立した状態は問題を深刻にします。ＳＮＳで顔が見えない人とならかえって繋がれることもあり心配です。人に頼れず、攻撃的な関わり方になっていく場合もあります。

子どもたちが社会的に自立していくために、人に相談してよかったと思えた経験を積ませ、ＳＯＳを出し相談できる力を育てることが必要です。

２　正しい答えを教えてもらうことより、まず聴いてもらうこと

問題によっては、直ちに改善策が必要な場合もあります。しかし、解答よりも、動揺する心を鎮め、混乱していることを整理する方が相談者にとって大事な場合が多いものです。

（１）誰かに全力で聴いてもらえる経験

教育相談は、「相談したい」という期待に応える教育活動です。「相談したら先生に説諭された」と子どもが思ったら失敗です。「わかってもらえた」「また聴いてもらいたい」と、次の相談につながることが第一です。

（２）答えは与えないで、一緒に考える・整理する

正解を教えがちですが、一緒に考えながら自分で見つけさせるのが上手な支援です。大事なことは何か、本当に望むことは何かと整理してやり、答えを見つけさせます。子どもは相談する時点ですでに答えを持っていることも多く、後押しを求めているのかもしれません。

（３）自分で決定することが大事

子どもが改善策を見いだせない時も、人に言われての決定ではないことが望ましいです。考えを伝えたり、選択肢を示したりしながら、子どもの意思で決定させます。



人工知能研究所の黒川伊保子さんは、よい子を育てる目標を持っている学校は、目標に照らして「叱る」「ほめる」ことがメインになり、子どもとの対話が信頼関係を築くコミュニケーションになりにくいと述べておられます。

先生も保護者も、子どもを指導するときには、『ゴール思考問題解決型』の思考になりがち。（略）意識の最初に、ゴールを設定し、それに向かって対処しようとします。「こうしてほしい」「こうあるべき」という目標に対して、子どもたちの言動を向かわせようとするため、できていれば「ほめる」、できていなければ「叱る」、もしくはできている子を「ほめて」認め、できていない子に正しい行いに気付かせる、ということに注力しがちです。（略）「お母さんはこうした方がいいと思うんだけど」とアドバイスするようなそぶりを見せつつ、子どもが自分の意見を言おうとすると、「あんたは黙って聞きなさい」と怒ってしまう。これでは何を言っても無駄だと思ってしまいます。

「子供の荒れに「ほめる・叱る」の二択ではダメ！」黒川伊保子（みんなの教育技術　小学館）

3　教育相談で活かすカウンセリングの技法　《　傾聴・共感・受容　》

導入 ～つながる言葉かけ～	始めは労をいたわり、歓迎、感謝、心をほぐす言葉かけをする。 「待ってたよ、来てくれてありがとう」「緊張するよね」
傾聴 ～聴いているサイン～	丁寧に耳を傾け、かつ「聴いているよ」のサインを伝えることが大事。 うなずき・受け止めの言葉「大変だったね」・時に質問をする。
受容 ～何のための相談か～	反論したくても、そうならざるを得ない気持ちを推し量りながら聴く。 そう話すに至る背景は何かに注視する。
反復 ～優しく丁寧に～	かすかに言ったことでも、こちらが大切にするように丁寧にくり返す。 児童生徒「一人ぼっちで寂しかった」→ 教員「うん、寂しかった」
言語化 ～表現したい気持ち～	相手がうまく表現できないことを言語化して、心の整理を手伝う。 「それは、こういう風に思ったのかな」
自己解決 ～誘導しないように～	できそうなら、解決の糸口となりそうな子ども自身の考えを引き出す。 「君としては、これからどうしようと考えている？」 「また同じことがあったら、その時はどうしようか？」

4　相談を望んでいない子どもの教育相談

呼び出しての相談は、「呼び出し＝罰」ととらえ心を閉ざすことがあります。こうした場合につながる言葉かけとしては「ほめる」言葉が有効です。まず子どもが来てくれたことを必ずほめます。服装、行動、考えなどをほめながら、子どもの興味・関心に沿うことを見つけます。何を言われるかわからないという不安感を拭って、次回の相談につなげることが目的になります。



5　自傷行為など深刻な悩みの相談

深い悩みの相談は、「つらさをわかってもらえた」と子どもが思えることが最優先です。感情的にならず穏やかな態度で聴き、質問しながら背景を共有しねぎらいます。善意であっても否定や説諭をすると、子どもは理解してもらえなかったと感じます。

（丹波教育事務所ＨＰ　ＴＮＢだより　令和３年６月号「悩みがある子どもへの支援」を参照ください）



6　反発する子どもの教育相談

子どもの反抗的な態度や言葉に、「相談」が「指導」になってしまうと目的を損ないます。受け流すスキルも必要です。問題解決の思いを伝え、子どもの内面の願いや不適応問題の背景を探ります。子どもの言動がその場で変容しなくても、一緒に問題に取り組むパートナーとしての姿勢を崩さないことです。



7　相談の後の対応・守秘義務について

子どもから「誰にも言わないで」と言われた時、自分一人に問題を閉じ込めることは解決を妨げます。その後、話をよく聞いた上で、「他の先生と協力していく解決していく必要がある」「あなたが大事で、あなたを守るため」だと説明して、情報共有の了解を得たいです。

【参考】「生徒指導提要」　文部科学省　　「解決志向ブリーフセラピー」森俊夫・黒沢幸子（ほんの森出版）